



『剣道を通して学んだこと』



徳島県
鳴門市光武館道場
中学2年 北 林 葵

平成二十七年十一月二十一日。この日、鳴門市中学校新人剣道大会が行われました。この試合は私の生涯において、最も思い出深い試合となるでしょう。

小学校二年生の秋、私は剣道を習い始めました。双子の弟が先に習い始めていて、練習や試合について行っているうちに、その時六年生だった先輩達が、

「一緒に剣道しよう。」

と、誘ってくれたのが、私と剣道との出会いでした。

鳴門市光武館に通うようになり、初めに習ったことは、挨拶をすることと、トイレのスリッパを揃えることでした。剣道とは違うことだったので、その時の私には、そうすることの意味が分かりませんでした。

今になって考えてみれば、それらのことが剣道につながっているものだと理解することができます。

まず、挨拶をするということは、「礼に始まり、礼に終わる」という、剣道の基本中の基本となるものです。トイレのスリッパを揃えるのは、次に使う人が気持ちよく使えるようにするためです。つまりそれらは、自分勝手な思いで行動をせず、他の人のことを尊重し、思いやるということです。それらの約束を守ることが、剣道のみならず、私生活においても大切なことだと感じています。

それから、すり足、竹刀の握り方や扱い方、防具を着けての稽古へと進んでいきました。

そして、試合に出させてもらえるようになりました。勝った時には嬉しさが心がいっぱいになり、楽しいと思えました。反対に負けた時は、悔しさが込み上げてきました。そんな時は、家に帰ってテレビを見ていても面白くなく、落ち込んでいました。そんな私を、誰よりも優しく励ましてくれたのが祖母でした。祖母は、試合に勝っても負けても

「ようがんばったな。」

と、優しい口調で声をかけてくれました。

私が四年生の頃でした。祖母は病気になりました。祖母は体調が優れない時でも、家から近い会場での試合には応援に来てくれ、いつも変わらず前向きに励ましてくれました。

また、優勝することができた時には、心から喜んでくれました。そしていつしか、「私が頑張れば、ばあちゃんが喜んでくれる。喜ばせることで、病気が少しでも良くなるかも知れない…。」
と、思うようになりました。

私が中学生になり初めての夏、ついに祖母は入院してしまいました。祖母のお見舞いに行くたび、
「ばあちゃん、次の試合見に来てよ。」

「ばあちゃん、次は絶対に優勝するけんな。」

と、今度は私が祖母を、励ますようになっていました。



そして、平成二十七年十一月二十一日、鳴門市の新人戦の日。前日から祖母は、呼びかけにも反応が無い状態でした。私は「絶対に優勝する²²」という、強い気持ちを持って試合に挑みました。団体戦では負けてしまいましたが、個人戦では優勝することができました。

その日の夜、祖母の元へ優勝の賞状を持って報告に行きました。すると、それまで意識の無かった祖母が目を開け、賞状を見てくれたのです。祖母は私を待っていてくれたのだと思いました。そして間もなく、祖母は穏やかに天国へ旅立って行きました。

それから一年がたち、剣道を通して今思うことは、指導してくださる先生方や家族、仲間達に支えられているからこそ、今の自分があるということ。そのことを強く胸に刻み、天国から応援してくれている祖母に恥ずかしくないよう、初心を忘れることなく、これからも、毎日の稽古に励んでいきます。そして祖母が私にしてくれたように、今度は私が、誰かを励まし、誰かの支えになれるような人間に成長していきます。